

白壁地区の近代建築／ 井元為三郎邸と西川秋次邸

瀬口 哲夫

I. 井元為三郎邸（榑木館）の建築と空間構成

1. はじめに

名古屋市東区榑木町二丁目にある、井元邸（写1）は、洋館と和館で構成された住宅で、豊田佐助邸と並ぶ名古屋を代表する近代建築のひとつである。日本館は、1924（大正13）年～1925（大正14）年、洋館は1925（大正14）年に建築された。井元邸の敷地は、矩形で、間口16.95間、奥行きは32間～39間、面積は561.22坪ある。現在、名古屋市指定文化財となっている（図1）。

2. 陶磁器貿易商で成功した井元為三郎（1874年～1945年）

井元為三郎（写2）は、1874（明治7）年、名古屋市熱田区中瀬町に生まれた。長じて、陶磁器輸出業田代商店に職を得て、陶磁器業界に入る。田代商店は加工完成から直輸出と幅広く商いをしていたが、販売に力点をおいた。このため、販売先はアメリカ、カナダをはじめ中南米、インド、南アフリカにわたっていたという。こうした中で、

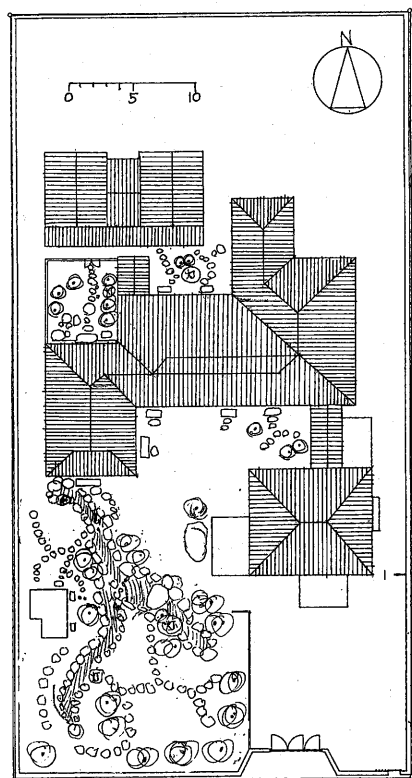


図1 井元邸現状配置図

井元為三郎は、田代商店神戸支店長を務めるまでになった。

1897（明治30）年に、名古屋市北区飯田町に、個人商店である井元商店を設立した。1903（明治36）年、槿木町3丁目に、井元商店は店舗、工場などを建設した。1909（明治42）年、サンフランシスコに日本トレーディング商會を設立、さらに、1921（大正10）年、ニューヨークに丸八商會を設立し、海外進出を図る。丸八商會は、後に井元ブラザーズと改称。

一方、1920（大正9）年には、シンガポールに南洋商行を設置し、東南アジア貿易にも進出す

る。これでわかるように、井元商店は、積極的に海外進出を図っている。

こうした上り調子の時期の、1924（大正13）年に井元為三郎は、名古屋陶磁器貿易商工同業組合長になる。

また、組合長就任直後の1925（大正14）年から槿木町二丁目に自宅の新築を始める。まさに、公私ともに、井元為三郎の絶好調の時期であった。

さらに、組合長井元為三郎の発案で、1928（昭和3）年、御大典記念事業として、組合事務所を新築することを決議。当時の組合事務所

は、槿木町にあったが、これが新築されることになった。

1931（昭和6）年、工業組合法にもとづいて、名古屋陶磁器工業組合が設立され、井元為三郎が理事長に就任。一方、新事務所の方は、1932（昭和7）年3月、東白壁町21番地において着工され、12月に鉄筋コンクリート造3階建ての名古屋陶磁器会館が竣工した。

この時期、井元為三郎は、自宅に東蔵を増築し、地階を鉄筋コンクリート造で完成させている。1934（昭和9）年になって、彼は、名古屋陶磁器工業組合顧問に就任。1941（昭和16）年、陶磁器産業振興に多大な功績があったとして、井元為三郎翁像が建立された。1945（昭和20）年に、71才で亡くなる。

井元為三郎は信心深い人物で、彼の処世訓は、「幸福は我心に在り」というもので、商売の盛衰に一喜一憂せず、心の平静を最大の眼目とし、書画骨董を愛する趣味人でもあったという（文1）。

3. 井元為三郎邸の建物

井元邸内部には、母屋、洋館など複数の建物があるが、これらの建物は、1925（大正14）年から1934（昭和9）年の約10年間に建築されたが、井元為三郎が49才～60才の頃のものである。

もともと、ここにあった建物を取り壊し、井元邸が新築された。既設の建物として東蔵などが残っていたようだが、1925（大正14）年に、敷地の中央にある本宅、翌年に門衛所が作られた。次いで、門を入った正面に洋館が建築された。

建築の順番が、本宅、門衛所、洋館ということになったのは、門脇の門衛所を除き、敷地の奥から建物が作られたためである。

1933（昭和8）年に、既存の東蔵の西側に地下室のある西蔵が増築され、東蔵との間に屋根と壁が作られ、物置がつくられた。

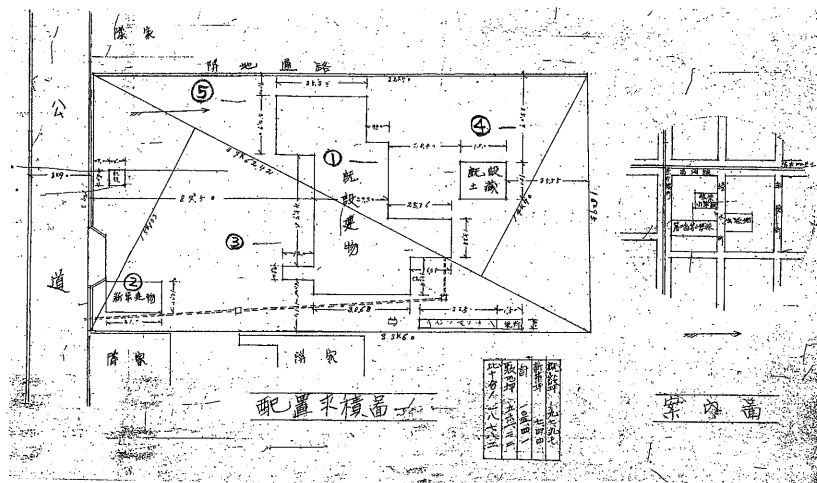


図2 井元邸配置求積図・番号は建築順（記入）

1933（昭和8）年までの配置図（図2）には、前庭に四阿があるが、現在はない。その代わりのように、前庭の西端に茶室がつけられている。この茶室は、昭和に入ってから移築とされている（文2）。

（1）母屋（日本館）／1926年竣工

日本館の母屋（図3）は、瓦葺き、木造平屋建てで、平面はL字型。生活空間として使われた東の居住部は、間口9間、奥行き4.5間で、東西に部屋が2列に並び、北側と南側に廊下がある。

西側の客座敷部は、間口3.5間、奥行き5.5間で、1列に2室並ぶ形式。2つの部屋を取り巻くように、廊下がコの字形にまわっている。

日本館の棟札によると「上棟 施主井元為三郎、大工杉浦徳太郎、左官高木松次郎、請負人柴田実衛、監督白木時三」などとなっている。裏面は、「大正14年10月15日」と上棟日が示されている。1926（大正15）年4月14日付けの「建物使用認可証」があることから、井元邸母屋は、

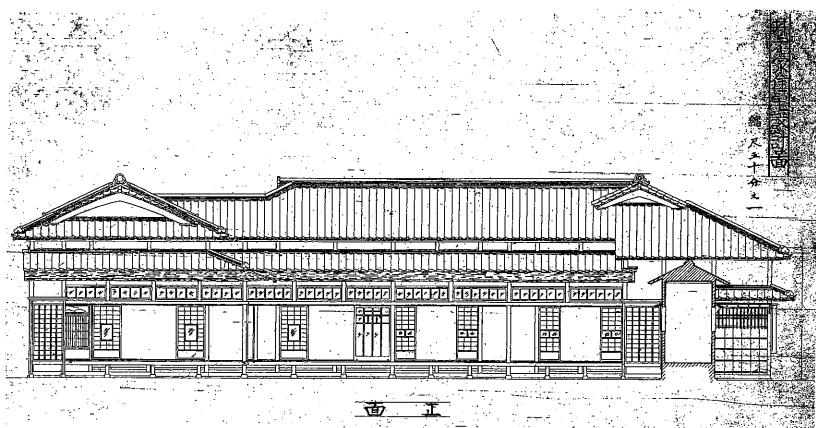


図3 井元邸母屋（日本館）正面図（1926年）

1925（大正14）年に着工し、1926（大正15）年に竣工したと考えられる。

（2）東蔵／1926年以前の建築

1926年竣工の母屋（日本館）の見積書には、レンガ造の東蔵についての記載がないし、配置求積図にも既設とある。これらのことから、東蔵は、1926（大正15）年以前の建築ということになる。

（3）門衛所／1926年7月竣工

門衛所（図4）は、母屋の建築に引き続き、建てられた。1926（大正15）年6月7日付けの「（門衛所）増築届書」では、「設計瀬木清吉、大正15年6月10日起工、同年7月10日竣工」となっている。瀬木清吉は、勢木建築木工所の代表者である。

正門脇の門衛所は、平屋建て、瓦葺き、半切妻屋根。外壁の腰部は板張り、上部壁はモルタル仕上げの洋風建築。東立ての和風小屋組。間口21.68尺（約3.5間）、奥行き12.34尺（約2間）で、面積は7.44坪。北側の出入り口から、入口土間に入ると、手前に6畳間があり、奥は、

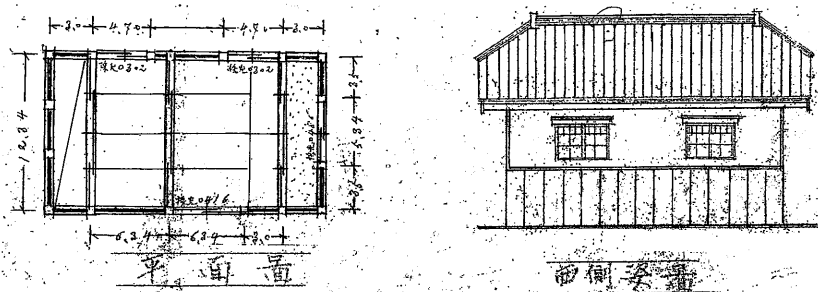


図4 井元邸門衛所平面図・西側立面図（1926年7月）

押入れのある4畳間で、こちらが寝部屋として使われた。1995（平成7）年に取り壊された。

戦前の井元商会では、店員の住み込み制度を採用しており、新入りの店員は井元家の本宅に寝泊りするということになっていた（文1）ので、この目的のために門衛所が使われたと考えられる。

（4）洋館／1926年～1927年竣工

母屋よりわずかに遅れて、建築された。1926（大正15）年9月9日の届けでは、「設計桑畑一志、井元為三郎直営、大正15年9月25日起工、大正15年12月末日竣工」となって、図面修正のために、桑畑の印を押した図面もある。洋館の見積書や領収書の名前から、勢木建築木工所が施工ということになる。1927（昭和2）年3月31日付け請求書などから考えると竣工は、届けにある12月末より遅れて、1927年になった可能性が大きい。

井元邸の配置図を見ると、すでに、洋館への渡り廊下が和館に付属しており、当初から洋館を建築する予定であったことがわかる。

計画通りに建築された井元邸の洋館は正門の正面にあり、背後の母屋は見えにくい。洋館は、スペイン瓦で屋根を葺いた寄棟造りで、壁

が土壁であることなどからスパニッシュ風建築となっている。屋根の上には、屋根窓がついている。開口部は上げ下げ窓。洋館は、間口5間、奥行き4間の矩形平面。

(5) 西蔵／1933年～1934年竣工

1933（昭和8）年になって、東蔵の西隣りに、西蔵が増築された。西蔵の設計図（図5、注1）は、1933（昭和8）年10月、志水建築業店技術部によって作成されている。従って、西蔵の竣工は1933年～1934年と考えられる。

西蔵は間口2間半、奥行き3間、地階1階地上2階建て。地階、1階、2階ともに面積は7坪半、延べ床面積は22坪半。地階はRC造であるが、1階と2階は木造大壁造り。木摺りの上に平瓦を張り、その上を土壁で中塗りし、黒漆喰仕上げとしている。西蔵の下部は、セメントモルタル仕上げとし、下部を保護している。

RC造の地下室には地中梁を用いている。地階の階高は、8.45尺、1階は9.1尺、2階は8.7尺。柱（4寸、4寸5分）と土台（4寸5分）に桧材を用いている。しかし、外部は、土蔵造りとして耐火性を向上させ、内装は横板張りにして、湿気の調整を図っている。縦の板材を使用し、床板の厚さは1寸。西蔵

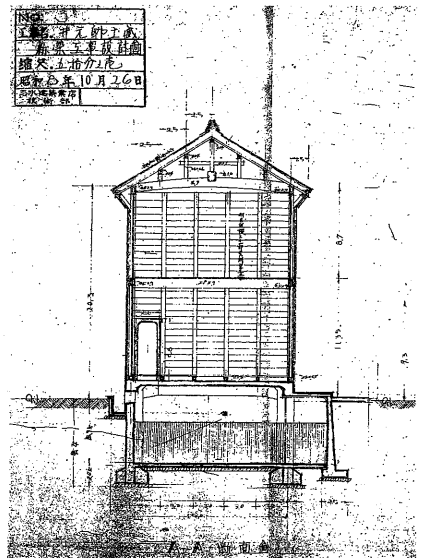


図5 井元邸西蔵断面図(1933年～1934年)地下室はRC造

の内部に2階への階段がある。小屋組は和小屋。

東西の蔵の間は、壁をつくり、その上に切妻屋根（和小屋）を架け、物置としている。物置の間口は7.6間、奥行きは2間半。柱と土台は4寸角。ここに西藏地階への階段がある。西藏地階の床は防水モルタル仕上げ。地階西側に、奥行き1.6尺、長さ12尺の採光用の空堀（上部にガラスブロックがはめ込んである。）がある。

この西藏増築前の1932（昭和7）年、名古屋陶磁器貿易商工業同業組合事務所の建物（現在の名古屋陶磁器会館）が、志水建築業店によって施工されている。西藏の施工を志水建築業店に依頼したのは、この時の縁と考えられる。

（6）茶席／1933年以降の移築

離れ座敷の前にある庭の西端に小高くなった場所があるが、ここに、茶席がある。茶室の手前に枯れ流れがあり、これが空間的な仕切りとなっている。茶室の規模は、間口1.5間、奥行き2間で、北側に2畳台目中板の茶室があり、南隣に水屋が付いている。床の間は半畳の大きさで、床柱は赤松。

井元家に残されている西藏増築時（1933年）の敷地配置図には、茶室が記載されていないことから、配置図の作成以後、つまり、1933（昭和8）年以後につくられたもの（あるいは、移築された）と考えられる。1933（昭和8）年には、井元為三郎は数えて60才になる。還暦を記念して作ったものかもしれない。

4. 複数案を検討した洋館の設計について

（1）複数案の検討

洋館については、1926（大正15）年8月の建築申請となっている。し

かし、洋館増築時の平面図が3種類、外観姿図が5種類（図6～11）残されており、これらにより、何度かの検討がなされていることがわかる。いずれの案も、門に向かって、正面に玄関を配置していること、西側に、ベランダがあるという共通性がある。

第一案（図6）は、屋根が水平な洋館案である。外壁上部には縦縞があるが、小さなタイル張り、下部は大きなタイル張りとなっている。屋上にペントハウスがあるが、これは屋上に出るためのものである。南側正面は、玄関を中央に配し、左右対称になっている。玄関上部は、アーチ状で、少し奥まったところに玄関扉がある。中に入ると、日本館への廊下が続いていて、左手に応接室があり、ベランダに続く。中廊下の右手は2階への階段と小部屋があり、2階南側は、球戯（ママ）室、寝室、押入れがある。

第二案（図7）は、屋根窓つきの勾配屋根のある建物で、1階の外壁はタイル張り、2階の外壁は、粗い仕上げで、文化住宅風の意匠に

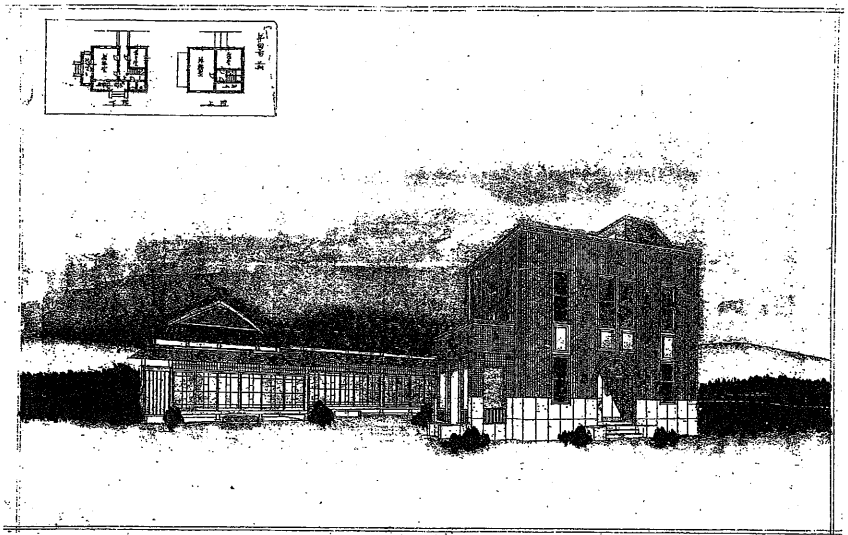


図6 井元邸検討案（第一案）

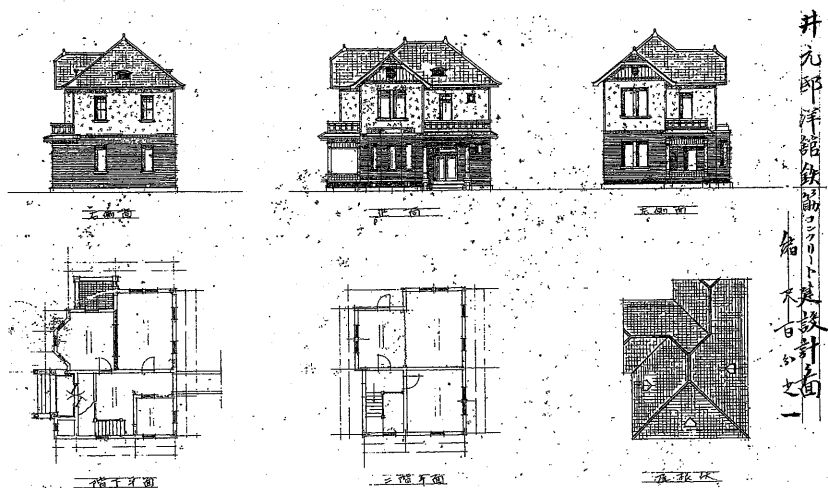


図7 井元邸検討案（第二案・第二A案）（RC造）

なっている。第一案とは異なり、玄関を南正面の中央でなく、少し右（東）に寄せ、西側に出窓を付けている。少し奥まった玄関、出窓、ベランダなど、正面（南側）の外観は深みを持ったものになっている。

第二案の平面は、中廊下型ではなく、2階への階段のあるホール（広間）型になっている。広間の左手（西側）には扉が二つあり、間仕切りで一部屋にすることのできる部屋が2つある。広間の右手奥には小部屋（厨房）がひとつある。2階の東側に1部屋、西側に2部屋（1部屋にすることができる）がある。この間取りは、現在の建物の間取りに近くなっている。ただし、現在の建物にあるような浴室（2階）が見当たらない。第二案は部屋名が入っていないので、用途を断定できないが、第一案の2階に寝室があったことから2階にも寝室があったと考えられる。

第二案の平面に対応すると思われる姿図が2枚ある。第二案を第二A案とし、姿図を第二B案（図8）、第二C案（図9）とする。第二



図9 井元邸検討案（第二B案）



図8 井元邸検討案（第二C案）

B案は、下部で反りのある大きな屋根、粗い仕上げの壁面など、ドイツ風住宅の趣があり、表現として個性が強い案である。

第二A案は勾配屋根のある文化住宅風であったが、第二C案では、妻壁部分はハーフティンバー、柱頭部や2階窓下部などの細部意匠が

幾何学的で、窓上部、2階ベランダの手摺りなどは曲線で、表現主義風な住宅になっている。

第二A案には、「井元邸洋館鉄筋コンクリート建設図」とあることから、第二案とした3つの案は、鉄筋コンクリート造が想定されていたことがわかる。第二A案のみに平面略図が付されている。

第三案(図10)は、瓦葺きの勾配屋根(小屋組は木造トラス構造)で、壁やスラブは鉄筋コンクリート造。ただし、1階床は木造。屋根には屋根窓がついている。パーゴラ付のテラスがあり、玄関の扉枠や庇に特徴がある。第二C案から装飾性を少なくしたものになっている。

第三案の平面図では、1階玄関を入ると、靴脱ぎがあり、ここで靴を履き代えて、広間にあがる。この広間の西側には半円の大きな窓が

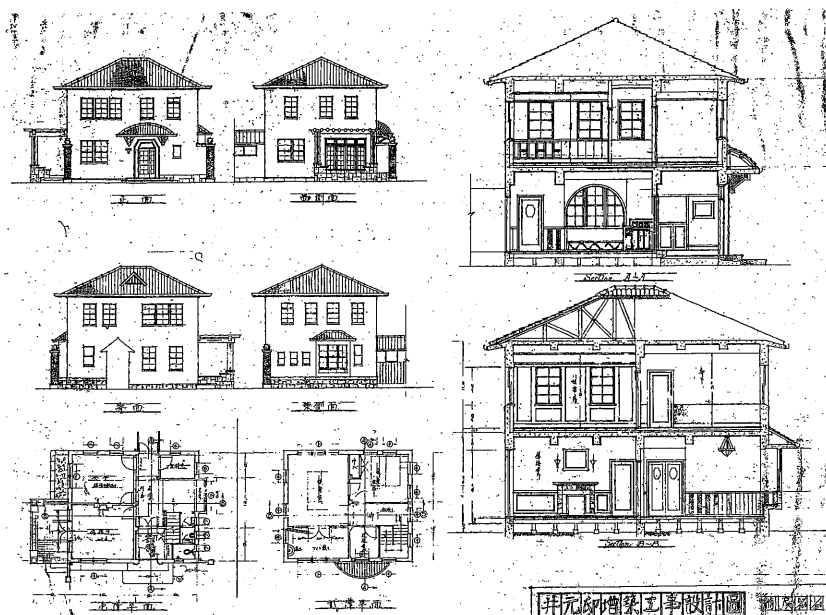


図10 井元邸検討案(第三案)(RC造案)

あり、その手前は腰掛になっている。広間右手に2階への階段と化粧室、正面右手奥に小部屋がある。正面に、奥の日本館につながる廊下がある。広間の左手に応接室（南側）と食堂（北側）がある。応接室の北側に暖炉があるが、煙突がないところから、電気ストーブなどを置くタイプのものと考えられる。食堂へは暖炉の右横のドアから出入りする。応接室の西側のテラスを介して庭に出ることができる。

第三案では、2階に、押入れ付きの寝室、娯楽室、化粧室（詳細図にこの名前あり）、サンルームがある。

断面図を見ると、暖炉付きの応接室は腰板張り、1階ホールも腰板張り、外に張り出した形の腰掛が作られている。1、2階の天井は張られておらず、梁がむき出しになっている。

構造図があるが、これは第三案の平面に対応している。断面図から推測すると第三案は、鉄筋コンクリート造で計画されていたことがわかるが、さらに、構造計算まで実施し、実現に向けて設計が進んでいたことがわかり、かなり案がまとまっていたことがわかる。

（2）実施案（第四案）

実現したのは、第四案である。そこで、第四案（実施案、図11）と第三案を比較すると、両者はほぼ同じであることがわかる。基本的な違いは、構造がRC造から木造に変わっていることである。なぜ、変更されたかは不明であるが、構造計算まで実施していることから、予算上の制約が主な理由として考えられる。

いずれにしろ、第四案は、第三案をそのまま木造にしたもので、小屋組は束立ての和小屋で、基礎は布基礎に変更されている。また、第三案と第四案では、その描き方から、図面の書き手が違っている。

第四案と実現したものについて細部を比較すると、若干の違いがあ

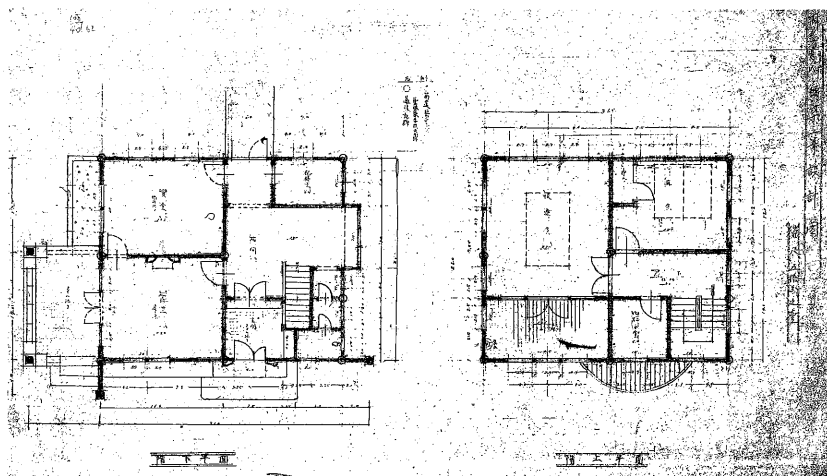


図11 井元邸木造（実施案）

る。例えば、第四案の玄関ポーチ庇は、浅いドーム型であるが、現在のものは、寄棟の屋根が柱で支えられたものになっているなどである。

ドーム型庇部分の図面（井元邸増築工事設計図、矩計図）に、「鉄製持ち送り、ボルト2ヶ所吊」などの書き込みがあり、当初は計画通りに実施するつもりだったようだ。しかし、実施するときに、これについても変更されたと考えられる。マントルピースは実施案にあるが、竣工したものではなくなっている。

（3）洋館の設計者と施工者

井元邸洋館の設計者については今のところはっきりしないが、第三案までは鉄筋コンクリート造で複数案が検討されていたことから、建築の高等教育を受けた人物と考えられる。「見積書に、御器所・勢木建築木工店、勢木清吉、洋館の透視図に長谷川富次郎のサインがある」（文2）と記録されているが、長谷川は、透視図のみを描いた可能性も



写1 井元邸外観



写2 井元為三郎（1874～1945）



写3 日本館客座敷と前庭



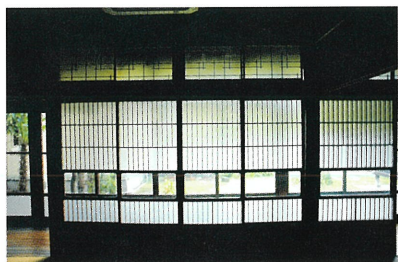
写4 東蔵（手前）と西蔵



写5 洋館テラス



写6 茶室



写7 日本館居住部ガラス障子



写8 日本館居住部ガラス障子



写9 日本館居住部欄間（群鶴）



写10 日本館居住部欄間（松）



写11 日本館客座敷外観



写12 日本館客座敷床構え



写13 日本館客座敷棚構え
(天袋にこうもりの把手)



写14 洋館玄関まわり



写15 洋館階段廻り



写16 玄関広間



写17 洋館居間



写18 洋館食堂



写19 洋館2階／娛樂室
とベランダ



写20 洋館2階 娛樂室ステンドグラス



写21 洋館2階 浴室



写22 茶室



写23 茶室水屋



写24 前庭 (右手が洋館ベランダ、正面奥は日本館)



写25 前庭 (右手は茶室)



写26 蔵前の庭



写27 客座敷次の間前の庭

あるので、設計者として即断はできない。今のところ、長谷川富次郎の経歴についても詳細は不明である。

実現した第四案は、第三案までの図面とは、表現の仕方がまったく違うことから、届けにある桑畑一志は実施設計を担当し、基本設計は別人と考えられる。

洋館の見積書として、柴田と瀬木のものが残されているが、見積書の内容から、瀬木清吉が施工を担当したと考えられる（注2）。

5. その後の変化と現状

（1）進駐軍時代の改変

井元邸洋館は終戦後の一時期、進駐軍に接收されたが、その時の書き込みのある図面がある。1階は食堂、応接室、広間、配膳室、便所となっている。2階は、寝室、化粧室、娯楽室となっており、基本的な違いはない。娯楽室には、ビリヤード、卓球という書き込みがある。娯楽室南の部屋は、泉水とタイルという書き込みがある。奥の日本館を井元家が、表の洋館を進駐軍が別々に使用していたことがわかる。

（3）井元邸のその後と現状

井元邸は、使い勝手から、洋館1階のテラスが温室に変えられ、厨房が拡大された。しかし、1994（平成6）年より空き家となった。

こうしたこともあり、市民を中心に井元邸を大切にしたいという運動がおこった。その結果、名古屋市の協力を得て整備することになった。1995（平成7）年に、正門脇の門衛所が取り壊されると共に、温室に変えられていたベランダが旧に復された。また、食堂と応接室の間にあった造り付け家具が取り外され、両室が一体的に使われるようになった。名古屋市当局の努力もあって、市の有形文化財に指定さ

れた。

1996（平成8）年より、建築士、デザイナー、フリーライターなどのグループが、所有者の井元家から建物を借用し、当初5年間の予定で、「榿木館」として、井元邸の活用・公開することになった。

榿木館の活動は多岐に渡り、市民から好評を博したため、最初の5年間に過ぎた後、さらに、2年間貸出しが延長された。

2005（平成17）年の愛知万博開催にあわせて、期日を限って公開されたが、その後は、ボランティアグループによって、土・日曜日に、市民に公開されている。

6. 建築的意匠

（1）母屋（日本館）

母屋は、居住部と座敷部の2つから構成され、これらはL字形に配置されている（図12）。居住部の平面は、2列6間取りで、玄関部分と勝手部分がつく構成である。

母屋の東側に玄関と勝手口がある。玄関は、土間（1間×1.5間、3畳の広さ）と4畳半の間で構成されている。玄関の間の右手に勝手（板の間）があり、玄関の間正面から、6畳間と南廊下に行ける。

居住部の西端には、床の間と押入れのある8畳間、その奥（北側）に仏間（6畳）がある。その隣に、和室（6畳間）が2室、さらに玄関より押入れ付の和室（6畳間）と勝手（板の間、8畳間）がある。この板の間は勝手土間（後に板張りになる。）に面している。居住部の北側にも廊下があるが、これは内向きの動線に対応したもので、勝手、浴室、便所へ行くのに使用される。

居住部に直交する形で、3室が北側に並んでいる。これら3室の床は、当初タイル張りであった。すなわち、勝手側から、6畳間（後に

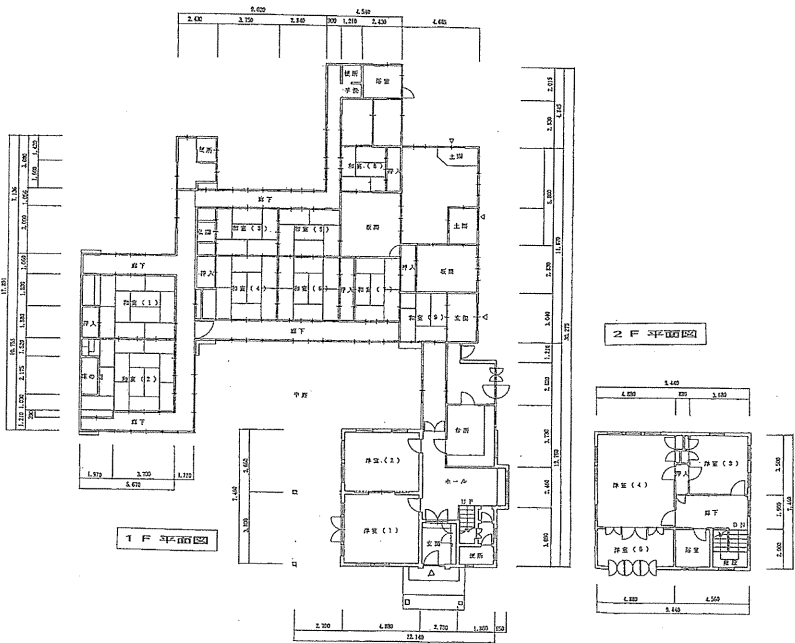


図12 井元邸現状（文2）（一部修正）

タイル張りの部屋から畳敷きの部屋に改変された)、洗面所（タイル張り3畳、これに3畳の脱衣所がある）、浴室（タイル張りで、7尺×8.35尺の大きさ）、便所（大小用別）となっていた。

客座敷は、付け書院、床の間、棚構えを本勝手に配した13畳の座敷と、棚と押入れのある次の間（10畳）の2間だけである。13畳の客座敷の長押の枕捌きは雛止めになっている。また、その棚構えは、天袋、違い棚、地袋で構成されている。天袋の襖には蝙蝠（こうもり）形の引手が用いられている。廊下側の上部は、変わり組格子の障子欄間となっている。

次の間との間の襖には、金色の山並みが描かれている。上部の欄間は、黒漆塗りの縁に、鳳凰の透かし模様を入れた板欄間である。

この部屋を三方から廊下が取り囲んでいる。南北に開口があるため、夏季の風通しがよい。夏向きの建物である。座敷部から勝手側にある便所が遠いため、後になって、座敷部の東北端（居住部の西北端）に手洗いと便所が増築された。

（２）洋館

一般的に洋館と和館を併置した、初期の邸宅の場合、洋館はもっぱら応接用で、寝室や厨房があるとは限らない。しかし、井元邸の場合、それらとは異なり、１階に食堂と小さいながら厨房があったこと、２階に寝室と化粧室があることなどから、ここで生活が完結できるようになっており、洋館を生活の場として、積極的に使う計画になっている。

洋館の玄関は、扉の上部と脇にガラス戸があり、内部への採光が考慮されている。上部の開口は、斜めに切り取られ、台形になっている。扉は、上部にガラスが入った框戸。玄関扉の周囲は、大型のタイルで縁取りされている。玄関庇の天井裏に八つ星型の模様が取り付けられている。

中に入ると、広間の東窓側にある半円のアーチ壁が目に入る。その意匠に大正モダニズムを感じる。その下は造り付けの腰掛になっている。階段脇にトイレがあるが、床と壁にタイルが張られ、ガラス戸上部に色ガラスが嵌められている。洋館の建具は、框戸が主体で、中には鏡板として楓板が使われたものもある。

洋館２階の寝室には造り付けの家具が壁に嵌め込まれている。娯楽室の天井隅には、渦巻き形のくり型模様が装飾されている。この部屋はやや広い部屋で、ベランダとの境には、色ガラスが用いられている。両サイドは橙色のガラスであるが、上部は格子状に区切られ、その中

に黒いクローバー、白いダイヤ、赤と青のスペードなどが描かれている。ハートがないが、これは人々の心の中にある。さらに、真中に白青の市松のパターンがあるが、これはチェス盤とみなすことができる。これらは娯楽室の装飾としてふさわしいと思われる。

娯楽室の前にサンルームがあるが、床はタイル張り、繰り型のある白い天井と白い壁で、三方に開口があり、冬季でも太陽が差し込む設計になっている。

（３）茶室

入母屋屋根の茶室(図15)は、北向きになっていて、北側に貴人口(腰付き障子2枚引き違い)、東側に躡口(にじりぐち)がある。貴人口の正面が床の間で、躡口の方からは、床の間が斜め前になる。天井は、点前座が落ち天井、他は斜めの掛け込み天井となっている。採光と換気用に、掛け込み天井に突き上げ窓がある。両方の天井ともすだれ張り天井で、竿縁として、丸太、細竹が用いられている。

茶室は、2畳半に中板の入った大きさであるが、台目畳2畳に丸1畳(点前畳)とし、中板を入れ、奥行きを深めた形式。客座は1間半であるが、そのままでは客が座りにくい。そこで台目畳2畳にして、座りやすくするとともに、客の上下の区分ができるようにしている。床の間は半間四方の框床。炉は点前畳に切られた向切で、二重棚(隅棚)付。茶室の窓は、下地窓をはじめ、意匠の異なった窓が4つ開けられている。点前座の上には、釜を吊るすために蛭釘と照明用の電灯が付けられている。

南隣に水屋があり、台目畳2畳の大きさの部屋で、腰板を回した流しと2段の棚、釣棚がついている。流しの明り取り用に、腰板の上の正面に障子の引き戸がついている。流しの左脇に開き戸のついた物入

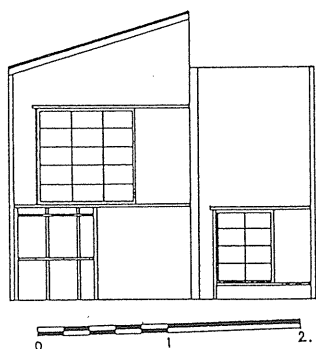


図13 井元邸茶室西側展開図（文1）

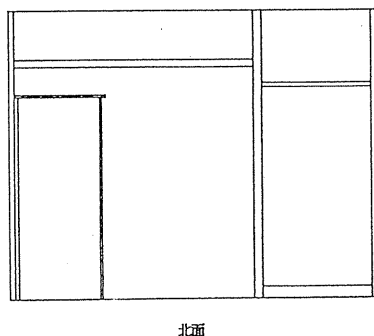


図14 同北側展開図（文1）

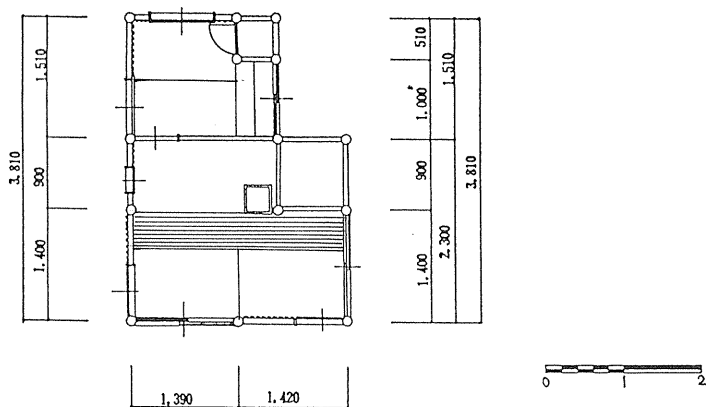


図15 同平面図（文1）

れがある。

水屋の南側に大円窓があり、室内を明るくしている。この円窓の引き障子の棧は斜めで動きのあるものになっている。

1938（昭和13）年、この茶席を用いて、茶会が開催されたという。井元為三郎66才のときである。

7. 庭

和館居室部の南から洋館ベランダ前までの間は芝庭になっている。これに対して、離れ座敷の前は、枯流れのある庭で、飛び石を渡り、茶室に至るようになっている。枯流れは2つに分かれており、茶室前のものとは別に、庭の東南部に至っている。庭は飛び石のある回遊式庭園で、枯流れには石橋が架かっている。

離れ座敷の北と蔵の間に坪庭がある。つまり、井元邸には趣の異なる3つの庭園（図1）があることになる。

8. 井元邸の利用

井元邸の日本館の方には今もガス灯口がある。大正期、この界限では、電気ではなくまだガス灯が用いられていた。このことについて、井元為三郎の孫啓太さんは、「子供心に残っているのは夕方ガス灯に火が入ると、青白い光とともにポーという音がしたことと、三度の食事は箱膳で食べると、自分で後かたづけをし、薄暗い台所で茶碗や箸まで洗われたことだった」（文1）と回顧している。

洋館については、来客のために用いられたと伝えられているが、家族も日常的に使用したという。それだけ、日本人の生活に近づいた住宅になっていたといえる。

9. 井元邸の特徴

（1）生活の場としての洋風住宅

和館、洋館が併用されている住宅事例の中で、洋館を迎賓用だけでなく、生活の場としても使用しているのが、井元邸の特徴である。

豊田佐助邸は和洋館の併用であるが、洋館1階が洋間で、迎賓用となっており、2階は畳敷きの日本間2間で、洋館の内部は和洋混用に

なっている。これに対して、井元邸では、洋館内部は完全な椅子式になっている。

井元邸の和館についてみると、居住棟と座敷の2棟があり、居住と来客が区別できるようになっている。これは、洋館が生活用に使用されることの裏返しと考えることができる。

（2）名古屋での鉄筋コンクリート造の萌芽的住宅

名古屋での鉄筋コンクリート造の住宅の歴史については、まだ不明なところが多いが、井元邸が当初の計画通りに実現していれば、名古屋で最初期のRC造の住宅になったであろう。井元邸の場合は、特に、RC造の住宅が実現するかどうか、試行錯誤をしており、住宅の計画過程が判明できたことは貴重である。

井元邸では、1933（昭和8）年に西蔵が建築されたが、この西蔵の地下室がRC造となっており、RC造化が部分的に実現している。もともと、蔵は防火建築にすることが多く、古いものは土蔵建築とした。1926年以前とされる東蔵は、土蔵風であるが、レンガ造の防火建築になっている。1933（昭和8）年の西蔵の地下はRC造であるが、1、2階は土蔵造で、混構造建築になっている。

（3）名古屋の建築文化の継承

町家に茶室を持つという名古屋の文化的伝統が、屋敷地の井元邸においても継承されている。井元邸の茶室は、当初からではなく、井元為三郎が還暦の時、整備されたものである。

謝 辞

井元為三郎邸の図面等は、井元家、名古屋市教育委員会から拝借し

ました。また、名城大学建築学科伊藤三千雄先生、畔柳武司先生の研究室が作成した報告書、「井元明正邸」を参考にさせていただきました。また、井元明正さんと井元佐智子さんにもお世話になりました。感謝します。

注

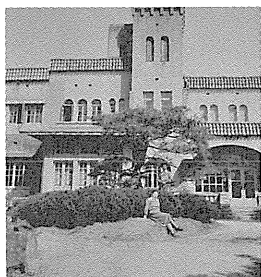
- 注1 図面表示は尺貫法が用いられており、尺で表現されている。
注2 2005年現在、名古屋市内には、勢木姓の名前は1軒あるが、建築業とは関係ないということであった。

参考文献

- 文1 「名古屋陶業の百年」名古屋陶磁器会館、1987年
文2 名古屋市教育委員会「井元明正邸（1995年度調査報告書）」1995年

Ⅱ. 最初の本格的な RC 造住宅／主税町の西川秋次邸

1. はじめに



写1 西川秋次邸

名古屋市東区の白壁地区は、明治以降、高級住宅地として、多くの近代建築が作られ、現在でも、その面影を残している。このため、この界隈は、名古屋市の町並み保存地区に指定されている。白壁地区の多くの近代住宅の中でも、旧西川秋次邸（現存していない）は、本格的な鉄筋コンクリート造住宅（写1）で

あり、名古屋市の住宅史の中でも貴重な存在である。

2. 児玉桂三邸／1925年～1926年

西川秋次邸は、1925（大正14）年～1926（大正15）年に名古屋市の主税町に建築されたという（注1）。この建物は、3階建ての鉄筋コンクリート造住宅で、戦前の名古屋を代表する鉄筋コンクリート造の本格的な住宅である。

この住宅は、西川秋次が建築したものではなく、愛知医科大学医学部の教授であった児玉桂三（注2）が建築したという。設計者、施工者ともに不詳。しかし、児玉桂三は、この建物にほとんど住むことなく、九州帝国大学へ転出。1943年、東京帝国大学教授となる。

児玉桂三が、児玉（豊田）利三郎の弟であったことから、豊田紡織廠の西川秋次がこの住宅を使用することになった。児玉利三郎は、豊田佐吉の長女愛子と1915（大正4）年に結婚し、豊田姓を名乗り、豊田紡織の経営に尽力していた時期である。このことについて、西川秋

次の孫である山本房江さんは、「(西川秋次が) 豊田佐吉翁に住みなさいといわれ、ここに住むことになったと母から聞いている」という。

さて、西川秋次が使用することになった主税町の旧児玉桂三郎（以後、西川秋次邸）は、家族が常住するのではなく、名古屋と上海を往復する秋次の妻田津がもっぱら使用。秋次は帰国した時に滞在するくらいであったという。

1927（昭和2）年、上海から帰国した豊田佐吉は軽い脳溢血を患い、療養生活に入ったが、この頃の佐吉は、時々、西川秋次邸を訪ねていたという。こうしたこともあってか、上海の豊田佐吉邸の家具（注3）が、西川秋次邸に譲られている。

3. 西川秋次について

西川秋次（写2）は、1881（明治14）年12月2日、豊橋市三弥町（旧渥美郡二川町字三ツ家）で、西川重吉、すみの次男として生まれた。名古屋市の愛知県第一師範学校で学んだが、豊田佐吉の勧めもあり、1909（明治42）年7月、東京高等工業学校（現、東京工業大学）紡織科へ改めて入学し、ここを卒業。

この頃、豊田佐吉は、豊田式紡織(株)の不振の責任をとるという形で辞職を迫られていた。東京高工を卒業した西川秋次は、失意の豊田佐吉に随行して渡米。シカゴ、ニューヨーク、ボストン、フォールリバーなどを回り、工場などの見学をした。佐吉の帰国後も、西川秋次は米国に居残り、紡績事業、紡織機製造状況などを調査研究した。



写2 西川秋次
（1881～1963）

1912（大正元）年12月の帰国後、佐吉が興

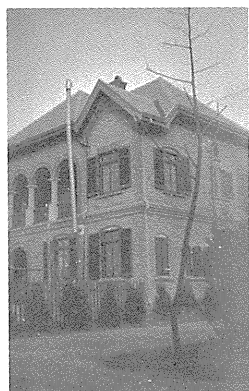
した豊田自動織布工場に入社。また、この頃、石川田津（半田市亀崎町出身）と結婚。

1914(大正3)年、豊田自動織布は、六千錘の紡織工場を設立、第一次世界大戦の好景気もあって成長を続け、1918(大正7)年、豊田紡織(株)に改組した。さらに、佐吉が上海に進出したので、これにともない、西川秋次も海を渡り、(株)豊田紡織廠設立に尽力。

以後、豊田佐吉のもとにあって、上海での経営の責任を持つことになる。佐吉帰国後も、秋次は上海において豊田紡織廠専務、華中豊田自動車工業(株)副社長などに就任し、これらの会社の経営につとめる。こうしたことから上海に二階建て洋館の住居(写3)を新築している。

しかし、満州事変、日中戦争と日中関係は悪化。こうした混乱期にあって、西川秋次は会社の経営に尽力し、中国に開設した豊田系会社の発展に尽くす。

西川秋次は、ほとんど上海で過ごし、日本と中国の間を往復する人生を送った。帰国したときに、名古屋市主税町の自宅を使用するくらいであった。名古屋公衆図書館(矢田績館長、元三井銀行名古屋支店長)主催の読書会で、上海爆撃など、当時の中国事情を講演したこともある。



写3 上海の西川秋次邸

上海時代、部下であった木村柳太郎(元豊田工機社長)は、西川秋次が、「一にも整頓、二にも整頓」、「健康第一」をモットーとしていたと述べている。また、無駄なお金を使わずに、お金を貯金しろという訓話を社員にすると共に、ダンスと麻雀が嫌いで、社員に禁止命令を出していたほどだったという(文1)。

西川は、事業につながるということでゴルフやテニスをやっていたが、上海では、楊樹浦のゴルフクラブのプレジデントをつとめ、ゴルフを楽しんでいたという。

1945（昭和20）年8月、終戦。1947（昭和22）年10月に、田津夫人は帰国したが、秋次は、「中国の復興なくしては、日本の復興はない」として、中国紡織機器製造会社の建設に参画した。その後、政情の変化で、1949（昭和24）年3月に帰国。

帰国した西川は、半田市亀崎の別荘（写8）に住み、名古屋駅前の木造2階建ての建物の中にあった日新通商（後の豊田通商）に通った。

ところが、1951（昭和26）年、軽い脳溢血を患う。このときは、亀崎の別荘に戻ったものの、いざという時に、医師の手当てが不便ということで名古屋市東区主税町の自宅に転居し、療養生活を送りながら、週の半分くらいは会社にでる生活になった。こうした中であって、後進の教育のために、1960（昭和35）年、財団法人西秋奨学会（理事長西川田津）を設立した。1963（昭和38）年9月13日、83才で亡くなる。葬儀は、豊田通商の社葬としてとり行われた。

4. 西川秋次邸の建築

（1）本館の空間構成

西川秋次邸（図1～図5）は、主税町4丁目にあり、南に面して建っていた。両開きの門を開け、前庭に入ると、正面に、一部3階建ての白亜の建物が目に入る。屋上には、凹凸のあるパラペットがあり、城砦風の建物（写4）となっていた。2階壁に沿った添柱の上に、魔除けのためなのか、怪獣のようなものが取り付けられていた。

正面にポーチがあり、そこへは四段ほどの石段を上がる。ポーチの壁は半円形にうがかれていて、玄関であることを示している。ポーチ

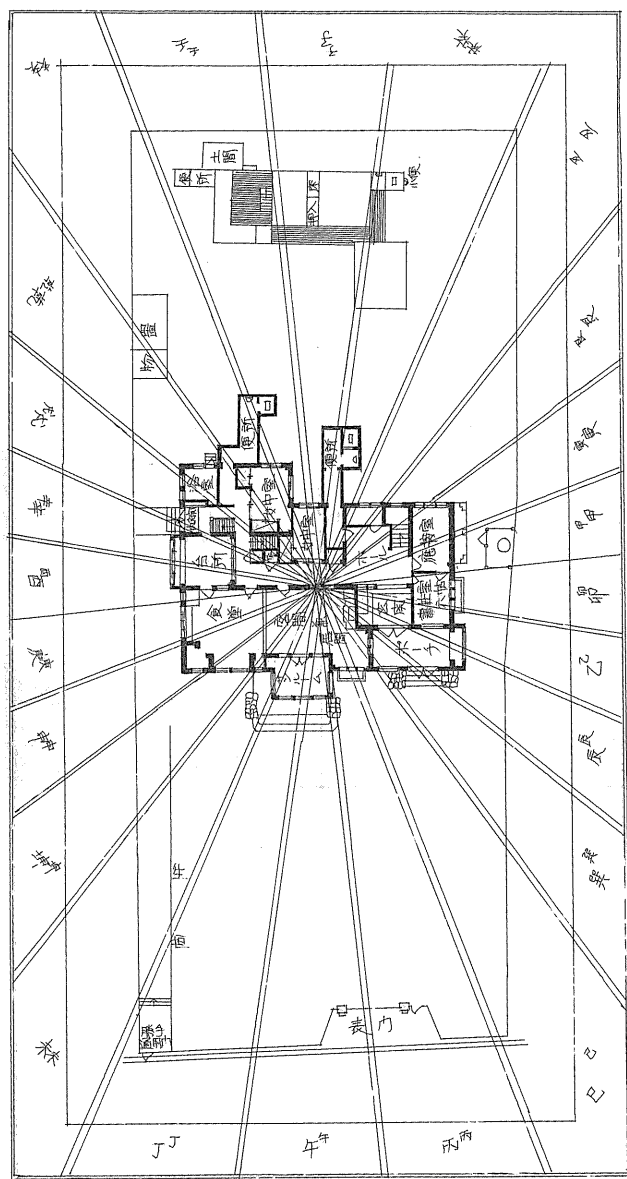


図1 西川秋次郎配置図（西川家所蔵図面を模写）

の床と腰壁はタイル張りで、右手に造り付けの腰掛がある(図1)。

ポーチの左手奥の玄関扉(両開き)を開けて中に入ると玄関土間があり、右手に腰掛け用のソファがある。ここで履き替えて、ホールに上がる。ホール右手に、床が寄せ木張りの書生室(六畳)と応接室が並んでいる。書生室には玄関を見ることができる開口がある。応接室と書生室は扉でつながっている。ホール正面に2階への階段があり、階段下は物入れになっていた。

1階平面は中廊下型で、廊下の左右に部屋が並ぶ。南側には、客間兼居間と食堂がある。客間兼居間には暖炉(東壁際)とアルコーブ

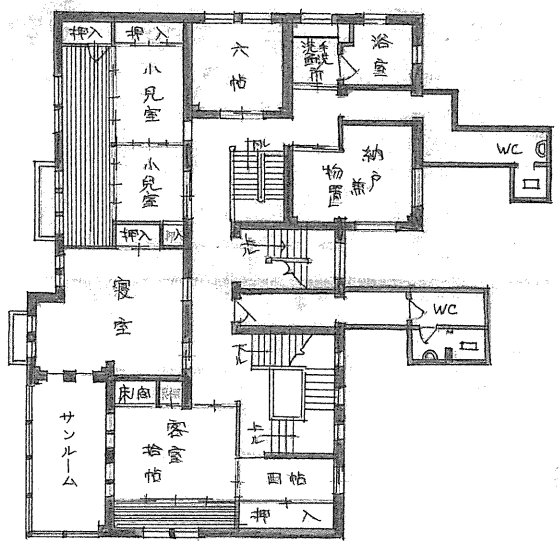


図2 西川秋次邸2階平面図
(西川家所蔵図面を模写)

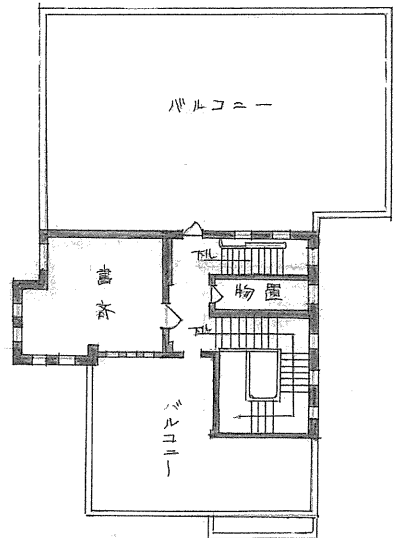


図3 西川秋次邸3階平面図
(西川家所蔵図面を模写)

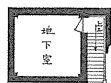
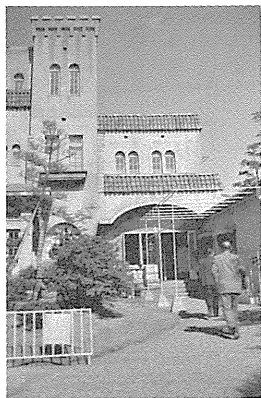
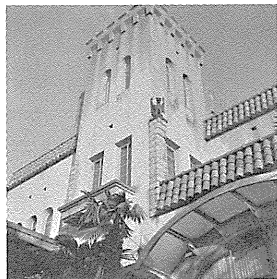


図4 西川秋次邸地下室平面図
(西川家所蔵)



写4 西川邸（増築部が
右手に見える）



写5 城砦風の西川邸



写6 ホールの階段下の
グランドピアノ

がある。暖炉は大理石製で、上に大きな鏡があった。客間兼居間のアルコーブのところにドイツのブルツナー社製のグランドピアノ（注4、写6）が置いてあった。

客間兼居間の南は、板の間のサンルームがあり、ここは日当たりのよい場所で、籐椅子が置かれていた。サンルームの扉を開けて、そのままテラスを経て、庭に出ることができる。

客間兼居間の様子について、西川秋次の同級生の一人は、「迎えられて通された応接室の豪華さ、室の内にある紫檀黒檀などの調度品、さすがに海外に雄飛してられる生活の一端もしのばれて……」（文1）と評している。



写7 台所の調理台
まわり

客間兼居間の隣は、食堂で、両者は間仕切りで仕切られていた。食堂は、食卓、椅子、造り付け食器棚があった。この部屋の西南隅に壁で囲まれたコーナー（図2）があるが、これは、西川邸になったとき、建物の角が欠けていると縁起が悪いということで改修したものという。

食堂の隣は、板の間の台所（写7）で、窓側（西）に流し、ガスコンロ、調理台などが並んで

いた。壁はタイル張りで、電気冷蔵庫や製氷室があったという。台所には、机、椅子があり、ここは料理の作業や女中さんたちの食事の場となった。

東西に伸びる中廊下の北側には、女中部屋（6畳）、押入れ、電話室など内向きの部屋が並んでいる。内玄関の北側に、浴室や便所がある。1階の浴室は風呂桶式であった。内玄関へは、勝手通用門から出入りすることになる。西川秋次邸には地下室（図5）があり、ここは食料倉庫として使われたという。

西川秋次邸の間取りで、特筆したいのは、便所の位置で、建物本体から離された位置に突き出す形に改修されていることである。

2階（図2）は、南側に寝室、子供室、客室が並ぶ。寝室と客間の角にサンルームがある。サンルームへは、寝室から出入りする。客室は、床の間、袋棚、板の間がある、10畳の日本間である。この部屋の隣に、4畳の控えの間がある。

子供室の前に奥行1間の板の間の空間がある。子供たちが共有する遊び空間であろう。2つの子供室それぞれに押入れがある。

その他の部屋として、北側に、6畳間、手洗い・洗面所、浴室、納戸兼物置がある。2階の浴室と手洗いは、家族と来客用である。2階にも便所が2ヶ所あるが、これも建物本体から突き出した形になっている。これらは妻田津が縁起をかついだ結果であるという（注1）。

3階（図3）には書斎、物置、バルコニー（東西2ヶ所）がある。書斎は、南側配置で、かつ、主人専用の階になっていて、バルコニーに出て遠くを眺めることができた。

西川邸の階段は、各階に2ヶ所ある。これは、一方が家族や来客用で、他方が使用人など内輪の使用のためで、動線が分けられている。

西川邸の特徴として、2階に共通の遊び空間を持つ子供室があるこ

と、主人専用の独立した書斎（3階）があること、家族・来客と使用人とを空間的に区分していることなどが挙げられる。正門と勝手門、階段、便所、浴室の区別などにそれが現れている。

（2）離れ

西川邸には、裏庭に木造2階建ての離れ（図1）があった。この離れの1階には、床の間と押入れのある6畳間と4畳半の次の間、板の間があった。2階への階段は、板の間にあり、便所は2ヶ所ある。2階の平面は不詳。

（3）西川邸の設備

当時の西川邸は水道、ガス、電気の利用が可能で、かつ、水洗便所になっていたが、秋次の妻田津が家相を信じ、不浄の便所を真北に出すことが良いとして、木造で改造した。このため、平面図にあるように、建物本体から便所を外に出した独特の形になった。

5. 西川邸の改造

秋次の妻田津は、この家の住み心地について、「使いにくいと話していた」という。また、彼女が家相に凝っていたこともあり、西川秋次邸は、先に述べたところ以外のところも少しずつ改修されている。家相については、東京の市ヶ谷に住んでいた柴田氏に聞いていたという。便所の位置の変更や、食堂の西南角の改修はすでに述べた。当初、玄関ポーチは、吹き放ちであったが、改修により、ガラス戸が入れられた。

この他、利用上変えられたところもある。1階のサンルームは、床を高くし、畳を敷いた部屋に変更されたが、これは、日当たりの良い

部屋を、椅子式から畳の部屋に変えたということで、完全な椅子式になじめなかったようである。

6. 戦後の再改修

西川秋次は、終戦後の1949（昭和24）年3月、中国上海から帰国して、半田市亀崎の別荘に住むことになった。しかし、1951（昭和26）年に軽い脳溢血を患った。このため亀崎から、名古屋駅前の会社まで通勤するのが大変となり、主税町の自宅に戻った。

1945（昭和20）年3月19日の名古屋空襲で、主税町の西川秋次邸も被災し、3階と2階北半分ほどが焼けたという。こうしたことから、修復工事（図5、6）が必要となった。また、西川田津が家相を信じており、その中に、「辰巳張り」というものがあった。建物の辰巳の方向が出張っているのを縁起よしとするものである。そこで、辰巳の方向にあたる、玄関前に、部屋が増築された。

増築されたのは、南側に広縁が付いた部屋で、押入れ付きで、隣に便所と2畳間があった。廊下で本館とつながる。玄関近くの書生室と応接室は、板張り床から畳敷きの和室に変更された。

また、本館の食堂には、畳が持ち込まれ、仏壇が置かれた。当初、本館から突き出して作られていた便所は、戦災で消失したと考えられ、復旧するにあたって、建物本体の中に便所を設置している。結果としてもとの位置に戻したことになる。

さらに、旧浴室を物置に改修し、建物本体のすぐ北側に木造で、浴室（家族用と使用人用）、洗濯場、便所、物置を増築している。戦後も使用人がいたこと、浴室などは、家族と使用人を区別していたことがわかる。

本館2階については、東側の客間10畳に廊下をつけて、8畳の間と



図5 増築後の西川秋次邸1階平面図（西川家所蔵）

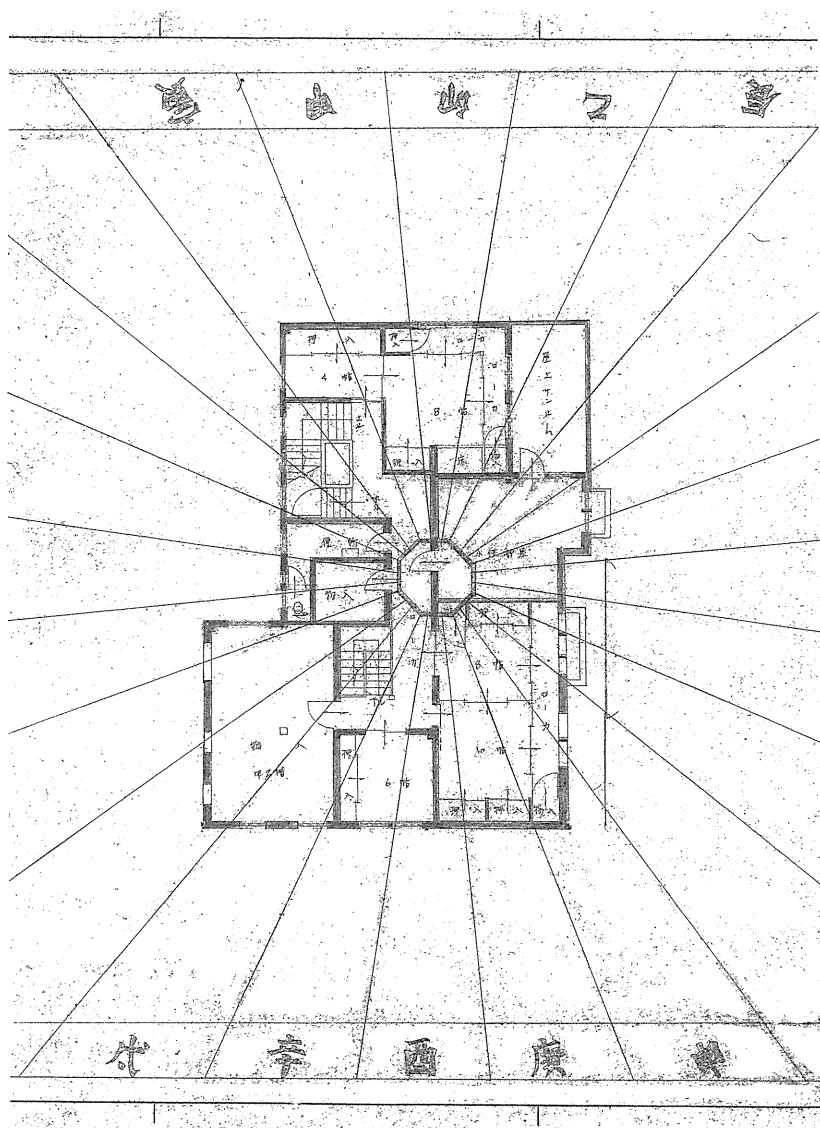


図6 増築後の西川秋次邸2階平面図（西川家所蔵）

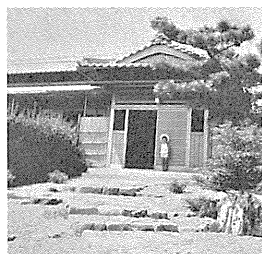
し、旧寝室を子供室に用途変更。さらに、旧子供室を押入れ付の10畳間と8畳間に改修している。当初とは、部屋の使い方が変化したことを示している。

さらに、2階の浴室と手洗いを廃止し、ここを物置にした。このため、1階に家族用の浴室が新たに設けられた。設備水準が上がったことを示している。

また、被災した3階の書斎を取り壊したことから、3階への階段が不要となり、このスペースを利用して、物置と便所が設けられた。

以上、西川邸の大きな変化は便所と浴室など水回りにおいてなされ、次いで、家族構成の変化に応じて居室の使い方を変化させている。

7. 亀崎別荘／1937～38年頃



写8 西川家亀崎別荘

1937～38年頃（注5）、西川秋次は、妻田津の郷里である半田市亀崎下高根町27番地に、木造平屋建ての別荘（写8）を建築した。周囲は生垣と土手に囲まれた傾斜地で、高みから遥かに三河湾を眺めることができる、風光明媚の地であった。

戦後、中国から帰国した西川秋次は、亀崎の別荘（図7）に住み、ここから名古屋駅前の日新通商（豊田通商の前身）に通った。

1943（昭和18）年頃に、玄関の間と2階建ての離れが増築されたという。特に、玄関の間は、「辰巳張り」の位置にあたるが、妻田津の家相の影響である。亀崎の便所も、突き出した形で作られているが、これも主税町の本宅と同じ、縁起を担いだ配置である。

門を入ると、正面に玄関があり、板の間、5畳の間、さらに、床の

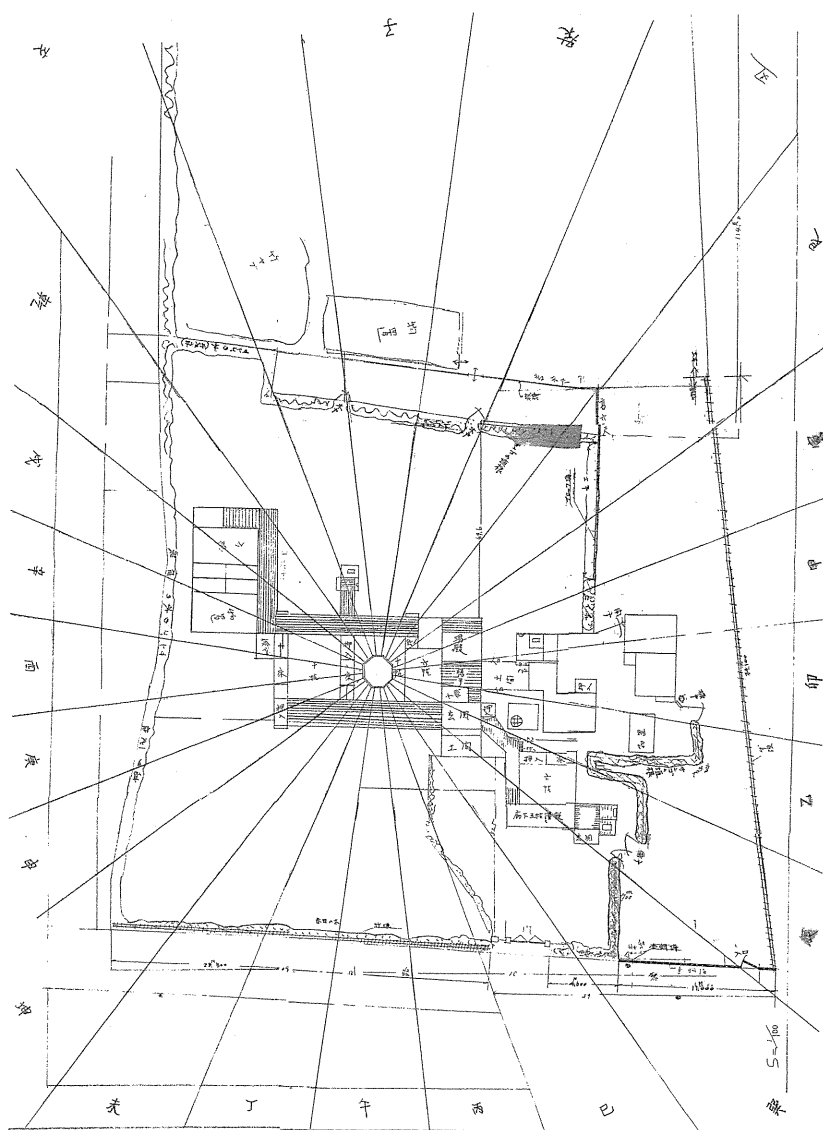


図7 西川家亀崎別荘平面図（西川家所蔵）

間と押入れのある6畳間があった。ここで来客を応接することができた。さらに、廊下を伝わり、母屋に行くことができる。

母屋には元々の玄関がある。母屋の平面は、1列型平面で、玄関側から6畳（次の間）、10畳（座敷）、10畳（奥の座敷）と並ぶ。手前の座敷（10畳間）には床の間と押入れがあり、奥の座敷（10畳間）には、床の間と棚構えが付く。10畳間の側にも廊下がある。玄関の背後に勝手と湯殿がある。両側に廊下があり、風通しのよい間取りになっていた。

母屋の奥には、木造2階建ての離れがあり、1階は6畳間と物置になっていた。玄関脇に、留守を預かる人の住まいがある。

現在は、二階建ての住宅（テラスハウス）が並んでおり、往時の別荘の建物は現存しない。わずかに、石組みが残るのみである。

8. 名古屋の鉄筋コンクリート造の住宅

戦前の名古屋の個人住宅として、全体が鉄筋コンクリート造のものは、ほとんどないとされる。「日本近代建築総覧」（1980年）の愛知県の欄には、西川邸と佐々成美邸の2棟しか記載されていない。名古屋市東区にある佐々成美邸は、RC造の二階建てと木造平屋の建物で構成されており、全面的なRC造住宅ではない。

「愛知県の近代化遺産」（2004年）には、神谷邸（東浦町、1937年）、成田邸（東浦町、1928年）が記載されているが、これらの住宅は、昭和に入ってからのものであるが、本格的なものでなく、住宅の一部をRC造化したものでしかない。

こうした中であって、西川邸は、大正期のもので、かつ唯一の本格的な鉄筋コンクリート造の住宅といってよく、名古屋の住宅史の中で極めて重要な位置にある。しかし、残念なことに、西川邸は、門扉を

残して、1981年頃に取り壊され、現存していない。

謝 辞

西川家、山本家所蔵の写真及び資料などを、山本幸江さんより拝借すると共に、貴重なお話を伺うことができました。感謝します。

注

注 1 西川秋次氏の孫山本幸江さんによる。

注 2 児玉桂三（1891年～1972年）は、帝国大学（現在の東京大学）医学部を卒業。医学博士。愛知医科大学、九州帝国大学の教授を経て、1943（昭和18）年、母校の東京帝国大学医学部教授となる。同医学部長。1953（昭和28）年4月より、1965年3月まで徳島大学学長を務める。1972（昭和47）年10月没。

自宅の一部を使って開業するつもりだったといわれる。玄関脇に続きの2室があること、玄関に近い部屋に小窓があることなどが理由と伝えられるが、このことの確認はできていない。

注 3 現在、豊田産業技術記念館のトヨタグループ館内に保管されている。

注 4 ブルツナー社は、ドイツのライプチヒにある会社で、西川邸のグランドピアノは、製品番号から1913年製で、中国天津で販売されたものという。1945年3月19日の名古屋空襲の際、西川邸も被災したが、ピアノの蓋にそのときの焼け跡が残っている。ピアノは居間やホールに置かれ、その位置は一定していなかったようである。

注 5 西川秋次氏の孫山本幸江さんによる。

参考文献

文 1 西川田津「西川秋次の思い出」自家本、1964年